

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷九第

行發日一月八年八正大

論 說

住居税の本質及其構造……………

法學博士

神戸 正雄

カーヘンターの社會改革意見……………

法學博士

河田 嗣郎

社會政策より觀たる吾國の財政(二)……………

法學博士

小川郷太郎

人糞尿の國益(二)……………

法學博士

財部 靜治

植民地の勞働政策(二、完)……………

法學博士

山本美越乃

時 事 問 題

支那の富源開放と其社會問題……………

法學博士

戸田 海市

銀行の手形引受制度……………

法學士

大森 研造

雜 錄

航空運送……………

法學士

小島昌太郎

今年度下半年期に於ける内地産米の

量、價に就いて……………

法學士

伊丹 萬里

社會問題評論……………

法學博士

神戸 正雄

今年度下半年に於ける内地産米の量、價に就て

伊丹 萬里

内地米の産額に付ては年々當該官廳に於て之を調査すと雖も、其數字は必ずしも正確ならず、昨年産額五千四百六十萬石となすも又もとより概算たるを免れず、既に其年産額の數量に於て然り、況んや昨秋端境期の混亂状態を受けて未曾有の變調を經來れる今年度上半期以後に於ける内地産米の正確なる量價を豫想せんとするが如きは蓋至難の業たり、茲に今年度下半年に於ける内地産米の量、價と謂ふも決して的確なる數字上の量、價を謂ふにあらず、單に概括的に今年度下半年に於ては昨年のその如く米量

の不足を告ぐる虞なきか、米價はしかく昂騰せざるや否や等の大體を豫想せんとするに過ぎず、而して黑人筋の見込を聞くも十人十色にして未だ必ずしも其觀る所を同ふせずと雖も其大綱に於て歸一する所を捉へ昨年上半年に於ける内地産米需給状態と今年のそれとを較量せば自ら左の如き大體の豫想をなすことを得べし。

一 昨年度新穀出初め時季の相場は石十六、七圓なりしに昨年度に於ては二十四、五圓の高値なりし爲め産地の買付け極めて順調に行はれ、

註 豐前米に依りて最近數年間の新穀出初時季の相場を見るに、大正三年十二月より翌四年二月頃まで十二圓一十三圓五十錢、同四年十二月より五年二月頃まで十三圓五十錢一十四圓、同五年十二月より六年二月頃まで十六圓五十錢を上下す、而して同六年五月末より漸騰して二十圓より八月には二十二圓、十一月に至り新穀出づるも尙漸騰を續け二十四圓となり、同七年二月には二十六圓五十圓となる、以上の如き數年の漸騰は或は之を以て絶頂となるやも知るべからずとなし農民競ふて持米を手離せり。

市場の在米豊富となり都市に於ては普通、市民は勿論工場大商店其他一般の勞働者に至るまで

其收入の多きを頼み、主として内地米を消費し

註 紡績工場其他の工場にても大抵内地米を用ひ大商店等の

使用人なども収益多きに飯米の不買なるものを以てしては満足せず、労働者は法外に賃銀収入の増加したる爲め奢侈に流れ最良の内地米を食したり。

且つ唯に飯米としてのみならず、或は糊、菓子製粉等の原料にも盛に轉用せられ

註 米二十五圓の當時に於て小麦は二十五圓以上の高値なり

し爲め菓子、糊等の内地消費品のみならず外國に輸出する小麦粉にも米粉を混用したり、某製粉所が米を用ひたるは其一例也。

加之、露、支、米等にも相當に輸出せられたり

註 概算七八十萬石は輸出せられたる如し

如右有様なれば外米、支那米、臺灣米等の輸移入の減少は當然と云ふべく朝鮮米の移入にも大に影響したり然るに之と同時に田舎地方に於ても世の好景氣に乗じて大、中農は勿論小農及地方労働者によりて多額に消費せられ、四月に及びては既に早く内地産米は其出越を稱ふるに至り。

註 買付米は殆んど市場に出で農民は唯だ其食料米のみを發して特米の餘裕なきに至れり

雜錄 今年度下半期に於ける内地産米の量、價に就て

如斯にして内地米の浪費と轉用と及び輸出と外米の輸入不振とは果然六、七月に至りて早くも其在米の不足を告げ四十圓突破の高値を呼び端境に近くに及んで更らに愈々昂騰の氣配を示したり

註 三月二十六圓五十錢、四月二十七圓五十錢、六月二十八

圓五十錢、七月三十五圓一十四圓、豐前米による

次で米騒動を招致するに至りて政府は一方に暴利取締令を適用すると同時に他方に外米輸入を企て地方民其他の持米を收容し、又地方も都會も盛に廉賣を行ひて只管外米價、米量の調節を圖らんとせしも而も小賣店に於ける正米は依然として漸騰五十三圓の高値を崩さず既に十月には例になく北陸地方の新穀など早くも中國筋に荷動を初め、愈々以て殘米の不足を暴露したり平年にありては十月に至り新穀出づるも實需要に取引さるゝこと少く、多くは十一月中旬以後十二月に入りて漸く新穀に手を付くるを常とす故に昨年度末は唯だに殘米の拂底したりしのみならず一ヶ月位の食込をなしたるものと觀るべ

第九卷 (第二號 一一五) 三三五

し、加之昨秋の收穫は平年作なりしを以て自然の成行に放置せば本年度下半年の端境期に於ける米の不足は昨年比して一層甚しかるべき也於茲官民共に之を憂慮し即ち種々の補充策行はる。

政府に於ては關稅撤廢、定期の外米代用等を許して外米の輸入を獎勵し、民間に於ては節食、混食、代食論等盛に行はれ都會に於ける工場、大商店、勞働者等は勿論普通家庭に於ても減食、混食、代食を實行し

註 工場にては内地米より鮮米、臺灣更らに外米等を用ゆるに至り大商店等に於ても好景氣なるに不良米を用ひては使用人の不平を招きしも世論を煽として麥食、混食或は代食等までも當然として強ゆるに至り、工場勞働者等は夜間の第四食を廢止して三食となすあり一般勞働者も又米價の高き爲め自然節食することとなり、普通家庭も種々の調理法を案出して米食に代ゆることを努めたり。

大に内地米の節約に努め又地方農民にありては主として端境期に於ける米價の昂騰を見越して自家の消費を代食にて節減すると共に容易に其持米を手離さず

註 四國、九州、中國筋等も買付思はしからず農民の耐久力意外に強し

内地産米の市場に出づるもの遅々として、爲めに正米市價は依然として高く、如斯にして一層都市に於ける内地米の消費量を牽制し、昨年の如き露、支、米等に對する輸出無之は勿論、菓子、製粉等に使用せらるること減じたるは更也外米、朝鮮米、臺灣米、支那米等の輪移入續々として行はれ

註 昨年十月以降の輪移入は外米は殆んど二百萬石に近く朝鮮米一百萬石、支那臺灣米合して百二十萬石以上にして既往十年間の同季輸入量中最多額の新記録と稱せらる。

米の出づること少きと入ること多きと彼此相應じて昨秋以來少くとも約八百萬石の補充節約をなし得たりと云ふべし、更らに尙外米は百萬石の輸入可能を存し、鮮米は例年にては百萬石内外の移入を見るに通ぎざるも今年は滿洲方面より粟を移入して代食とし其産米の輸出货量増加を圖りしが故に尙二百萬石内外の移出能力を有す尙支那には防穀令あるも江蘇米は大連、臺灣、青島に廻送せられて我國に轉入の途あり、臺

灣に於ても移出禁止の總督府令撤せられ内地移入の自由あり、傍々目下の状態にては本年度下半年に於ける在米は相當潤澤なるべく米價も中庸を得るものと觀測せらる。

然れども昨今の定期米暴落の爲め外米の未輸入分一百萬石の輸入は今の所採算上行胸みとなり臺、鮮米等の移入影響を受け、一方正米價格又漸次下向の非を示さんとするが爲め飯米の不足に對する一般民心の緊張聊か弛緩したるの恐れなきにあらざるも今年の米、麥作柄にして非常なる凶作にあらざる限り、又政府或は大資本家に於て妄りに不自然なる或は不當なる政策、商略を強行して人心に異常の刺戟を與へざる限り

註 米は商人間に於ては怪物視せらる、人心の氣配一つにて或は有餘るに隠れ或は皆無視せられざるに何れよりか出現す不思議のもの也。昨年當地に於て飯米廉賣の行はれた最中に毎日制限量の米を買ふては之を質屋に入れ其入れたる金にて米を買ふことを繰返すことが流行し質物倉が米倉に變つたのも少くなかつたと言ふ例があります。

今日までの食延べ

註 地方農民の食延べ、手持米は意外に多額なるもの、如く

にして下半年に於て或は意外の結果を見んも知るべからず。

及輸入

註 既輸入分の外米中未だ消費せられざるもの東京、神戸等にて百萬石を有す。

を以て優に端境期に備ふるに足るべく、若し價格にして法外なる暴騰の勢を示さば上述の如き輸入可能力の隨時實現となるべく従つて此儘にても今年の下半期に於ける飯米量は先づ少くとも需給一杯となるべく價格も眞の生産費を基礎として三十五、六圓の所を上下するものと見るを得べき乎。

(大正八年四月五日)